

● 四国

岸 啓子

瀬戸フィル（高松市）は3月に三ツ橋敬子指揮のもと上野耕平を迎えてアルトサックス協奏曲（逢坂裕作曲）を披露し（第42回定期）、9月には2度目の指揮となるA.ソリアーノをスペインから招いてギター協奏曲（ギター：ダビ・M・ガルシア）を含むスペイン音楽を情熱的に演奏した（第43回 フラメンコ：荻野リサ 9月）。編成と規模を自在に変え、地域の音楽家を巻き込みながら、「能楽とオーケストラ」（宇田津町）、「思い出の心のうた」（四国中央市）、会員コンサート等を実施し、高松名物となった丸亀商店街での「街クラシック」（11月）や、行政・教育機関と連携しての0才からのコンサート、学校巡回芸術・鑑賞教室も精力的にこなして圧倒的存在感を示した。

高松交響楽団もまた日常に溶け込む音楽活動と高度な芸術追及をシームレスに実現し、美術館コンサートやジュニアオーケストラ育成に尽力する傍ら、舞踏と音楽の多角的繋がりを軸に、定期演奏会ではハチャトリアンの『ガイーヌ』他を熱演し（132回指揮：小森康弘）、秋にはチャイコフスキー『くるみわり人形』全幕を島田バレエ団と上演した（指揮：山上純司）。また2020年から続く「高松ベートーヴェン記念祭」連続演奏会にも貢献してきた（企画・指揮：大山晃 7月）。第9源流の地であり第9を街のうたとも祭りともしてきた丸亀市では、第9演奏会が2つのイベントと共に例年通り実施された。

愛媛交響楽団は、2度の定期演奏会でフランスとスペイン音楽（第52回 指揮：大谷麻由美）、ドイツロマン派音楽を好演し（第53回 指揮：上野正博 pf：福富彩子12月）、福富のシューマンのピアノコンチェルトは、湧き立つ情熱、甘さと翳りを湛えた抒情性、詩的なピアノリズムで聴衆を魅了した。徳島交響楽団は、フランス音楽によるニューイヤークンサート（指揮：中田延亮 チェロ：伊藤悠貴 2月）とチェコ音楽による定期（第54回 指揮：石毛保彦 9月）を実施し、高知交響楽団は、大曲を並べる従来方式から離れ、芥川也寸志等多様な作曲家の親しみやすい名曲による演奏会を行った（第174回指揮：平川範幸 vl：山本志奈 香南市、第175回指揮：大市泰範 高知市）。四国フィルも健在である（指揮：澤和樹 雲の上のコンサート）。人口3万人の高知県四万十市で30年の歴史を刻んできた四万十国際音楽祭は残念なことに昨年終了したが、中村交響楽団は今後も活動予定である。

3年連続してオペラ公演を実現させたオペラ徳島は、『イル・トロヴァトーレ』（第22回12月）で大成功を収め（指揮：三原寛志 演出：奥村啓吾 マンリーコ（トロヴァトーレ）：樋口達哉他）、さわかみオペラも地元のコーロ・インダコと『ラ・ボエーム』を熱演した（12月）。

四国二期会（香川）は過去に演じたオペラの名場面を取り上げて実力を示し（第50回記念ガラ・コンサート 指揮：松下恭介 演出：中村敬一 丸亀シティフィル 9月）、徳島支部はオペラ・ガラコンサートを、愛媛支部は「歌曲とオペラ～珠玉の名曲の花束～」（第41回11月）を、高知支部は「歌い継ぎたい心の歌」（小林他）を公演した。香川ではオペラ『扇の的』小編成ダイジェスト版の再演があり（四国村農村歌舞伎舞台 指揮：大山晃 10月 瀬戸内海国際芸術祭）、しこちゅーオペラ（四国中央市）はコンサートを実施した。オペラ・えひめはプッチーニの名曲によるコンサートを開催した（第16回定期 指揮：金正奉）。また音楽物語『一寸法師』（松山市）など小さいながらきらりと光るイベントも散見された。

高知バッハカンタータフェラインはバッハの宗教カンタータを演奏し（第28回定期 主宰・指揮：小原浄二）、コレギウム・ムジクム高松はロマン派のバッハ解釈にも踏み込み、実力ある歌手を揃えてコンサートを展開した（第29回指揮：大山晃 tn：若井ほか）。第8回高松国際古楽祭（音楽監督：柴田俊幸）は直島と高松市を拠点にチェロ独奏会や和楽器を交えたガラ・コンサートで盛り上がった。

岸 啓子（きし・けいこ）

東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科（音楽学）修士課程修了

愛媛大学教育学部音楽科に教員として40年勤務

愛媛大学名誉教授

著書 はじめての音楽史（音楽之友社 分担執筆）他